








見沼たんぼ生き物調査&観察会・レンゲの種まき <3-①>










日時	2022年10月9日(日) 10:00~12:00		
調査員	認定NPO法人水のフォーラム 川崎達治(環境カウンセラー) 佐藤正太 山形華子ほか	調査地	見沼区 見山・片柳 ・田(循環型伝統農法による稲田) ・遊休農地(地力回復のための休耕地) ・溜井(たんぼビオトープ池) ・里山(田に接する斜面・平地林)
参加者	25名(子ども12名、大人13名)		

【調査結果】

種類	見つけた生き物	分類		メモ
貝類	ヒメタニシ	ゲンシチュウゼツ目 タニシ科		日本全国の水田、用水路、池などに分布するが、ナガタニシは琵琶湖だけに棲息する固有種。
クモ類	ナガコガネグモ	クモ目 コガネグモ科		水田によく出現するので、水田の農業害虫に対する天敵としてはそれなりに活躍する。
	アオオサムシ	コウチュウ目 オサムシ科		捕まえると臭い液を飛ばす。
	アキアカネ	トンボ目 トンボ科		「赤とんぼ」。夏にも低地で見られる赤とんぼをナツアカネ、夏に低地から姿を消し、秋に大挙して出現するのをアキアカネと呼ぶが、両種にほとんど差はない。
	エンマコオロギ	バッタ目 コオロギ科		卵→幼虫→成虫(不完全変態)の虫。寿命は1年。日本の季節変化に合わせたものとなっている(年1化性)。
	オンブバッタ	バッタ目 オンブバッタ科		バッタ類の多くはイネ科やカヤツリグサ科の植物を食べるが、オンブバッタはクズ、カナムグラ、カラムシなど葉の広い植物を食べる。
	コバネイナゴ	バッタ目 バッタ科		水田に多く生息し、イネの葉を食べるので農業害虫として扱われる。また郊外の草むらなどにも生息。
	シバズ	バッタ目 ヒバリモドキ科		卵→幼虫→成虫(不完全変態)の虫。体は淡褐色で側面に太い黒帯。芝生のような明るい草地に生息する。「ジーイ、ジーイ」と長く鳴く。

昆虫

トゲヒシバツタ	バッタ目 ヒシバツタ科		卵→幼虫→成虫(不完全変態)の虫。前胸の両側に突出する棘があるのが特徴。水田の畦等、湿った所に見られる。
トノサマバツタ	バッタ目 バッタ科		緑色型と褐色型の2タイプがある。天敵はスズメバチやカマキリ、キリギリスなどの肉食性昆虫、クモやムカデなどの肉食性節足動物、ヒキガエルやトノサマガエルなどの両生類、ヘビやトカゲなどの爬虫類、モズやチョウゲンボウなどの鳥類、キツネやタヌキなどの哺乳類、菌類。
ハネナガイナゴ	バッタ目 バッタ科		コバネイナゴによく似るが、羽の先端が腹や後ろ足を大きく超える。しかしコバネイナゴにも同様の物があるので、同定にはオス交尾器の形状を要確認。
オオスズメバチ	ハチ目 スズメバチ科		全ての陸海空の有毒生物中トップクラスの毒を持ち、かつ攻撃性も高い危険な種。
キアゲハ	チョウ目 アゲハチョウ科		ヨーロッパからアジア、北米北西部にかけて分布。そこでいくつかの亜種に分かれ、日本に分布するのは亜種 <i>P. m. hippocrates</i> 。それら亜種を別種とするこの場合、日本産は <i>P. hippocrates</i> 。
ナミアゲハ	チョウ目 アゲハチョウ科		単にアゲハ、またはアゲハチョウとも呼ばれるが、これらの呼び名は他のアゲハチョウ亜科のチョウとの混称や総称として使われることも多い。小学校および中学校の理科では、本種は「アゲハ」としている。
ノコギリクワガタ	コウチュウ目 クワガタムシ科		成虫の活動期は6月上旬から10月。広葉樹や照葉樹の樹液などを餌とし、クヌギ・コナラ・ミズナラ・ヤナギ・ハンノキ・ニレ等を集まる。基本的に夜行性だが昼間でも木陰などで見ることができ、樹上の高い所で休んでいることが多い。
ハイイロゲンゴロウ	コウチュウ目 ゲンゴロウ科		まるい目玉がとてもかわいい。名前の通り体のハネの部分に灰色で、小さな黒い点々が縦にきれいに並んでいる。
ハリカメムシ	カメムシ目 ヘリカメムシ科		褐色で、やや細長いカメムシ。胸部の両端が強く突出している。平地、山地のイネ科、タデ科などの植物でよく見られる。
アオウキクサ	オモダカ目 サトイモ科		水田、池沼、溝などの淡水域の水面に生育し、特に水田では極めてふつうにみられる一年草。
アメリカタカサブロウ	キク目 キク科		熱帯アメリカ原産の一年草。関東以西の水田や水路、路傍、放棄水田、畑地に広く帰化している。タカサブロウは在来種。
イチョウウキゴケ	ゼニゴケ目 ウキゴケ科		世界各地に分布。池や水田の水面に浮遊して生育し、泥土の上でも生育できる。水質汚濁や農薬の使用で減少し、一時は環境省のレッドデータブックで絶滅危惧I類に指定。2007年度版では準絶滅危惧。

植物	イヌタデ	ナデシコ目 タデ科		ヤナギタデに対し、葉に辛味がなくて役に立たないという意味で「イヌタデ」と名付けられた。赤い小さな花や果実を赤飯に見立て、別名「アカノマンマ」。
	イヌビエ	イネ目 イネ科		水田や路傍、荒地などに生育する一年草。この仲間は田植え前後に芽生え、イネの出穂に先だって8月頃に開花結実し、イネが刈り取られる以前に種子を散布。イネに擬態し、稲作のサイクルに適応した水田雑草。
	エノコログサ	イネ目 イネ科		全世界の温帯に分布。日本では縄文時代前半までではなく、粟作とともにアワの雑草として伝わったものと推測される。花穂がイヌの尾に似ていることからイヌコログサ→エノコログサ。ネコジャラシ。
	キンエノコログサ	イネ目 イネ科		穂の形がエノコログサと似ているが、穂にびっしり生える毛が黄緑色のエノコログサと異なり、黄色。その黄色が光を受けるさまを金色と見たのが名の由来。 日本では同属のアキノエノコロとともに最終氷期から自生。縄文時代中期以降に入ってきたエノコログサより古株。
	コガマ	イネ目 ガマ科		洪水などで出来た水深の浅い湿地を好む。近年は、湿地が開発されたり、洪水などが減り、陸地化が進み生育地が減少している。
	ヒメガマ	イネ目 ガマ科		直立した花茎の上側に雌花群、下にそれよりやや太い共に茶色の雄花群がつく。雌花群と雄花群の間は花茎がむき出し。 モウコガマと似ているが、ヒメガマのほうが葉の幅が広い。ガマやコガマにも似るが、ガマやコガマの雌花群と雄花群の間には隙間がない。
	キツネノボタン	キンポウゲ目 キンポウゲ科		同じキンポウゲ属のウマノアシガタやタガラシと共通する成分(ラヌンクリン ranunculin)を含む有毒植物。誤って食べると口腔内や消化器に炎症を起こし、茎葉の汁が皮膚につくとかぶれる。
	セリ	セリ目 セリ科		日本では古くから食用にされ、『万葉集』にもセリ摘みの和歌が謳われている。 大型で姿かたちが似ている毒草のドクゼリに注意。特に春先の若芽はセリと間違いやすい。ドクゼリは地下茎が緑色で太いたケノコ状の節があり、横に這わず、芳香もない。セリは白いひげ根がある。
	ツユクサ	ツユクサ目 ツユクサ科		『万葉集』には、古名の月草や鴨頭草(つゆくさ)を詠ったものが9首あり、古くから日本人に親しまれていた花の一つ。朝咲いた花が昼しぼむことから、儂さの象徴として詠まれたものが多い。
	ハエドクソウ	シソ目 ハエドクソウ科		和名ハエドクソウは蠅毒草の意。この植物全体に有毒成分があり、根をすり卸したり、煮詰めた汁でハエ取り紙製造に使われていることに由来。主な毒の成分はリグナンの一種フリマロリンで、食べると嘔吐などを引き起こす。
爬虫類	カナヘビ	ユウリン目 カナヘビ科		体表面がカサカサし舌先は2つ。土に潜る習性はなく、尻尾の割合は全体の3分の2程度。一方、トカゲは体表面に光沢があり、舌先が1つ。土に潜る習性があり、尻尾の割合は全体の半分程度。